和歌のなかの厳島神社

干潮時に大鳥居を足元から眺めることは、今日宮島観光のハイライトの１つとなっています。ところが、こうした様子が文献に描かれるようになるのは、江戸時代後期に岡田清が編纂した『芸州厳島図会』（天保 13 年〈1842〉刊）を待たねばなりませんでした。それ以前からこうした楽しみ方もあったのでしょうが、少なくとも文学作品や紀行文に描かれたり、和歌に詠まれたりすることはありませんでした。では昔の人々は、厳島神社のどのような姿を書き留めてきたのでしょうか。和歌をヒントに考えてみましょう。

『芸州厳島図会』巻一（天保 13 年〈1842〉）

厳島神社を訪れる人々が何よりも魅了されたのは、海に浮かぶ大鳥居の佇まいであり、また潮の満ちた社殿の様子でした。これまた、現在でも我々を惹き付ける厳島神社の姿と変わりはありませんが、満ちくる潮の捉え方は、今と必ずしも同じではありません。

　みな人の願ひを満つる潮なれば残れる磯も見えぬなりけり　平経盛（『経盛集』）

「満つる」には「願ひを満つる」と「満つる潮」という二つの意味が掛けられています。満ちてくる潮は、あらゆる人々の願いを満たしてくれる厳島神社の恵みの深さを象徴するものとして捉えられていたのでした。遙かに時代が下った江戸時代でも同様に、

　いつくしま満くるしほのいやましに深き恵みの神ぞ祈らん　似雲（『としなみ草』）

などと詠まれており、昔の歌人たちの多くが抱いていた認識でもあったようです。次の歌は厳島八景の１つ「厳島明灯」を詠んだ歌です。

　宮嶋の神のめぐみも満つ塩に見えて影そふ百の灯　乙部可寛（『厳島八景』）

潮の満ちた夜、鉄灯籠の灯が海水に映っている幻想的な景色が詠まれていますが、ここでも「満」は上下に掛かります。このようにして、古人は満ちた潮と満願とを重ね合わせながら、厳島神社への尊崇の念を表現してきたのでした。

ところで、幻想的な厳島神社の夜といえば、次のような景色もよく歌に詠まれます。

　さすしほに光をそへて島の名の宮居涼しき夏の夜の月　似雲（『としなみ草』）

古人の目を通して厳島神社を味わうのも、また一興かもしれません。

（高松 亮太）

（「宮島学センター通信」第 7 号・2016 年 3 月）